
テク×2（テクテク）

沢崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テク×2（テクテク）

【NZコード】

N6115Y

【作者名】

沢崎翔

【あらすじ】

テクテクと、ただ歩く。

たつたそれだけのことが、一生忘れられない思い出になる。

それが、100kmハイク。

これは100kmを歩く中で、様々なことを感じ、成長していく人たちの群像劇（になる予定）です。

感想など頂けたらうれしいです。

2011年11月19日（土）14：00

リアル100ハイ開始と同時に連載スタート
「ボースカウト東京連盟」「100kmハイク」で検索。

1歩目・100ハイ×ベーゴマ

24時間以内に100kmを歩いたことのある人が、一体どれほどいるだろう。

…まあ、僕はあるけど。それも、2回。

100kmっていうと、マラソン2回分よりも長い。東京から熱海まで行けてしまうほどの距離だ。

それだけの距離を歩くものだから、ゴール付近になるともう、一歩踏み出すたびに足の骨が粉々に碎けるような激痛に襲われることなんか当たり前。

ゴールした後だって、その場で着の身着のまま眠り込んでしまう人や、痛そうな顔をしながら足にできたマメを潰す人もザラにいる。休憩所に広がるその光景は、まさに戦場の野営病院を彷彿させるほど凄惨なものだ。

それだけのダメージを体に与えるほど過酷なイベントだから、当然然後遺症もひどい。

完歩から一週間以上経つても杖なしでは歩けない人や、中には足を疲労骨折してしまう人もいる。

幸い僕はそこまでひどい後遺症に悩まされたことはないんだけど、たまに長時間立ち続けていたりすると、左足首の外側が痛くなってしまうことがある。たぶんそれも、後遺症の一つだと思つ。

じゃあ、一体何のために？

完歩したら100万円がもらえるとか、テレビで取り上げられて有名人と会えるなんていうおいしい要素なんか一切ないのに。

そんなに辛い思いをしてまで、一体僕は、何のために100kmも歩くのだろう？

…わかんない。何でだろう？

いや、特に深い理由なんかないんだよ、きっと。

だって、嫌だらうがなんだらうが、歩かなくちゃいけないんだもん。

それが、100kmハイク。

都のボーカウト連盟が毎年11月に開催している、かなり狂ったイベントだ。

だって24時間で100kmも歩くんだよ？もちろん、寝ないで。

「狂歩」と書いて、「100ハイ」と読みます。…なんてね。

さて、少し話が脱線してしまったけど、そもそもそんな面倒くさくて辛いイベントに、何で僕は参加しなくちゃいけないのか？

実はそれは、僕が大学で入っている部活と関係がある。

それが、ローバークルー部。

ちょっと変わった名前の部活だけど、要するに「ローバーカー」というのは、ボーリングの大学生バージョンだと思ってくれたらい。

そんな聞き慣れない名前の部活に興味本位でなんとなく入ってしまったのが、運の尽きだった。

実はこの部活、都のボーリング連盟に加盟している。

だから当然、連盟が主催する100kmハイクには、加盟団体の一員として参加しなくちゃいけないのだ。

ああ、2年前、かわいい女の先輩たちに唆されて入部届にはんこを押してしまった自分を殴り飛ばしてやりたい！

…まあ、今さらそんなこと言つたって仕方がないんだけど。

とにかく、早くこのアンケートを埋めなきや。

そう、申し遅れましたが僕こと中井雄浩は今、今年で3回目を迎える100kmハイクなかいたけひ 通称100ハイに関するアンケート用紙を前に、もう1時間近くも無駄にうだうだ考え込んでしまっているのだ。

「田指せ、100ハイマジック！あなたがラブを咲かせたい人はだれ？ぜひ×2指名してちょう（も・ち・ろ・ん、「さきこ」）つて書いても大歓迎だよん？」

…イタい。イタいよ、咲恋。

名前もイタいけど、この質問のテンションはもはや読むに堪えないよ。

「恋が咲く」という名前を付けられてしまつたばかりに、「わたし、今まで恋なんか咲いたことないもん!」と開き直つてみんなから憐みに満ちた失笑を誘うのを得意とするのが、僕の同期である森野咲恋もりの もりこという女の子だ。

そんな彼女だけど、今回の100ハイでは部活の代表者として、連盟の人たちといろいろやり取りをしている。

更に彼女は今回の100ハイで、誰もがつらやむ「ある権利」を握っている。

それはローバー部員なら、一度は乱用……いやいや、願わくば使わせて頂きたいなあと思つもの。

…100ハイで一緒に歩く、男女ペアを決める権利だ。

そう。100ハイは原則的に、男女2人ペアで歩く。

真夜中に入気のない田舎道を歩くこともあるから、安全上の問題のため、夜間に女の子が1人だけで歩くことが認められていないのだ。

だから女の子が歩く時は、必ず男とペアになつて、一緒に歩かなきゃいけないというルールになつている。

…これで何かが起こらないわけがないじゃないか！

実際、僕の1学年上に当たる女の先輩なんかは、2年前の100ハイが終わってからしばらく経った後、ペアを組んでいた男の先輩と別の意味で「ゴールイン」してしまった。本当にうらやましい限りだ。

生まれてこの方、女の子とデートしたことさえない僕としては、100キロを歩くだけで彼女できるんだつたら、足の一本や2本くらい、全然潰したつて構わないと思つ。

それに付き合つたのは至らないまでも、100ハイの前よりもずっと仲良くなるという男女ペアはけつひ多め。

やはり、100キロを24時間以内に歩くといつも極限状態の中では、普段はだらしがなくていい加減な男だってどこか頼もしげに見えるし、いつもほつるさくて小憎らしい女の子でさえ、不思議とかわいく見えてしまうものなのかも知れない。

そしてそういう数々の現象を、人は俗に「100ハイマジック」と呼ぶ。

結局、それが目当てで100ハイに参加するといつ人も少なくないんじやないかと、僕は思つてゐる。

ていうか、そうでなければ僕たちは、ただ頭が狂つているだけのDM集団だ。

そんなわけで僕は今、今年の100ハイのペアを決めるかも知れないこのふざけたテンションのアンケートに、ある女の子の名前を書こうかどうか、真剣に悩んでいる。

シャーペンを置き、頬杖を突きながら窓の外の景色をぼんやり眺める。

10月の常盤松大学じきわまつだいがくのキャンパスは、2週間後に迫った大学祭の準備に追われる学生たちの姿で賑わっている。

僕が今座っている所からは、お揃いのパークーを着た何人かの集団がダンスの練習をしている光景が見て取れた。

みんなしてベーハマのよつて、忙しそうにぐるぐると回り続けている。

一体あの人たちは、何が楽しくてあんなにぐるぐる回っているんだろう。

まあ、そんなことを考えたって仕方がないか。

あの人たちからすれば、僕が1ヶ月後に100kmを歩こうとしていることだって、意味がわからないことだと言い出すに決まっている。

でも、今回の100ハイは、僕にとって特別な意味を持つ。

「今年の100ハイ、一緒に歩いて下さい」

そう言つた彼女の言葉が、さつきから頭の中で何度もリフレインしている。

本気で言つたんだろうか。でも、もうかなり前の話だもんなあ。

… そりだよ、忘れていたに決まっている。

何期待していらっしゃったんの？

止めたきなよ。どうせ、またイタイ思いをするだけなんだからさ。
過去のトライカムが、僕の右手にその子の名前を書いてことを躊躇される。

でも……。

もし彼女があの時の約束を覚えてくれていて、このアンケート用紙の同じ項目に、僕の名前を書いてくれていたとしたら……。

ため息をついてから、再びシャーペンを手に取る。

書こう。……いや、やつぱり無理。せつとかう、そんな堂々巡りの繰り返し。

本当に情けない。結局僕は、いつもいつもだ。

2回も完歩したくせに、これが恋愛となると、最初の一歩さえ踏み出すことができない臆病者なんだ。

はあ、君のアンケートを見る「ことができたらなあ。

…ねえ。

君は本当に、僕の名前をひらがなでじに書いてくれたのかな？

奏
か
な
で
ち
ゃ
ん
。

1歩田・100ハイ×ベースボール（後書き）

はじめまして、【1歩田】を読んで頂き、ありがとうございます。
さて、物語中に登場する「100ハイ」は、実在しているイベント
です。

そしてこの話は、僕が実際に100ハイに参加した経験をもとに書
いています。

だから「足を疲労骨折するなんて、そんなバカな」と思っている方。
事実です。

ウソだと思つたら、100km歩いてみて下さい。

⋮「冗談です。

さて、この物語の主人公の一人である中井さんが100kmの道を
歩き出すのはもう少し先の話になりますが、どうかその日が来るま
で、読み続けて頂けたら嬉しいです。

2歩田・膝×クラー(前輪)

【2歩田・膝×クラー】

2歩目・豚×クラト

あおきかなで
青木奏ちゃんは僕と同じ部活で一つ下の後輩に当たる、ちよつと変わった女の子だ。

「豚を食べにきました。」数日、もやししか食べてなかつたんでそう言つて、彼女は何の前触れもなく、ひょうひょうとした様子で現れた。

その日は地域の大学生ローバーが何人か集まつて、幼稚園くらいのボーリスカウトのこどもたちに、豚の丸焼きを振る舞うというイベントの日だつた。

常盤松大口ーバーからは役員である僕と咲恋、それに2年生の松山哲^{やまさとじる}が参加することになつていたんだけど、まさか奏ちゃんが来るなんて。

そんな話全然聞いていなかつたから、僕はすっかり面食らつてしまつた。

「ありがとう、奏ちゃん！来てくれて」

そう言つて、咲恋がはしゃいだ様子で話しかける。

「ねえ、聞いてよ、奏ちゃん。他大の子がメールでさ、『オレ、今日バイト入つてたの忘れてたわ』…お前、ふざけんなよ、ジーザス！って感じでさ。ちよつと困つてたところだつたんだよね」

「マジですか？よししゃ、豚が一人分浮いたぜ」

もう言ひて、奏ちゃんが小さくガツッポーズを取る。

ああ、この子、絶対に何か勘違いをしている。食べるだけじゃないんだよ？僕たちが焼くんだよ？豚を。ちゃんと働いてくれるのか、なんだか心配になつてきた。

やつぱり、彼女はどこか変だ。何かがみんなどすれているようしか思えない。

女の子なのに、しゃべり方などいか男っぽいし、おしゃれにも全然無頓着なようだ。

最近は暑いからつて、上はダボダボのTシャツのペペロテ。しかも今日は、よみによつて高校時代のクラスTシャツの日かよ。もつ何回見たことか。ドクロのマークが背中に描かれた、紫のクラー。

そんな格好で、平氣な顔して新宿や渋谷の街中を出歩くんだもん恥ずかしくないのかなあ。今日だつて、他大の人たちもたくさんいるのに。

こんな感じで、化粧品を買つくりながら一週間豪勢に肉を食べ続けるつて言い切るのが、青木奏という女の子…つて、あれ？

おかしいなあ。女の子っぽい要素が、一つもないぞ？

「ねつ？見てよ、じどもたけ。たくさんいるでしょ？みんなかわいいよねー」

「えっ、IJなんにいるんですか？参ったなー、わたし、IJビも嫌いなのに」

性別不詳な奏ちゃんが頭を搔きながら面倒くわざうに言つ姿を、遠目から見つめる。

…ああ、あつた。女の子っぽい要素。

長い髪。しかも、墨をこぼしたみたいに黒くてきれいなストレートヘア。

それとコントラストを描いて際立つ、白くて透き通った肌。
そしてビニが醒めた印象を抱かせる、切れ長の目。

「まあ、豚だけ食べて、さつあと帰ればいいか

がくつ。せつかく人並み外れてかわいく生まれてきたのに、中身の方はもつと人並み外れているからなあ。

彼女が普段何を考えているのか、本当によくわからない。

そんな彼女のことを「火星人」と呼んで煙に巻く人も少なくないけど、僕は嫌いじゃない。

むしろ、ついやめてしまつてしまつ。

彼女は、ちゃんと自分を持つていて。

常にふらふらしながら生きている、僕とは違う。

僕も彼女みたいに、堂々と自分をさらけ出すことができたらなあ。

「いや、でも、さすがにクラークを着る勇気はないな。

まあ、落ち込んでいても仕方がない。時間になつて、メガネをかけた男の人が集合をかける。どうやら、彼が今日のイベントの責任者らしい。

いくつぐらいいだろ、少なくとも、大学生のようには見えない。

集まつた大学生スタッフにいろいろ指示を出すんだけど、その異様に高い声が耳にまとわりついで、かなりうつとおしい。

しかも妙に馴れ馴れしくせに、言つていることがイマイチよくわかんないし。本当に大丈夫なの、この人？

それでも、豚を焼く台座を組み立てる手際の良さは、お見事と言うしかなかつた。

難しいのに、炭に火を点けるのだけれど、3分もかからなかつた。どうやら、彼のボイスカウトとしてのスキルは、本物のようだ。

「すごいですよー？ あの人、がく夏田さんって言つんだけど、なつめ間瀬田大学ローバーのOBさんで、今はプロのスカウトをやつてるんだって」

「…で？ 今はどんな仕事をしてるつて？」

「えつ？ だから、プロのボイスカウトだつてば」

「ねーよ、そんな職業！」

要するに、ただの一ートじゃん。やっぱりヤバいな、あの人。あ
あいつ大人にだけは、なりたくないな。

2歩目・豚×クラト（後書き）

ローバークルーはボースカウトの大学生版といつて、いつも
つた活動も行っていました。

他にも地域の「じども」を連れてハイキングをしたり、餅つきをしたこ
ともあります。

3歩目・火星人×しゃくれアゴ星人

さて、順調に焼き始めた豚だけど、実はここから先が長い。

炭の遠赤効果でじっくり炙るものだから、夏田さん曰く、焼き上がるのに5時間近くもかかるそつだ。

「うわー、みんなお腹を空かせて帰っちゃうよ。僕も帰りたいけど。そうさせないために、今からおにぎりを作る班と、一組もたちと遊ぶ班に分かれるといつ。

どつちの班がいいか、手を挙げて選んで欲しいと夏田さんが説明する。

その結果、僕たち常盤松大口ーバーの4人は咲恋以外、みんなおにぎりを作る班を選んだ。みんな小さいこどもが嫌いだからだ。

ははっ、僕たち、一体何をしてここに来たんだろうね？

ええ、そうですよ。僕も松山も、じゃんけんに負けたせいでこんな雑用をさせられているのだ。

それでもなければ、誰が貴重な休日を犠牲にしてまで好き好んでこんな所に…って、奏ちゃんはそのクチだつたか。

「中井さん。知っていますか？豚の脳みそって、中国では珍味として重宝されているんですよ」

「飯をよそいながら、奏ちゃんがそんな豆知識を披露する。なぜか彼女は、こういうマニアックな方面に異様に詳しきたりする。

「しかも『豚の脳みそスープ』っていうのがあって、写真を見たんですけど、もつそのまんま、豚の脳みそがスープの上にプカプカ浮いて…」

「きめーよ、お前、いつもそんなもの食つてんのかよ？」

「気持ちはいいに話す奏ちゃんの言葉を、松山がすかさず遮る。
「この2人、同じ学年なんだけど、いつも何かにつけて言い合って
いる。

そりゃあもひ、「ケンカするほど仲がいい」なんてレベルじゃない。たぶん、本当に仲が悪いんだと思つ。

「食つてねーし、基本毎日もやしだし」

「ウソつけーお前、どうせまた貧乏の振りをして同情引くつひとつ
るだけだらうが！」

「うるさい。黙れ、しゃくれアゴ星人

「だーれがしゃくれアゴ星人だあ！」

また始まった。みんなが見ていて、恥ずかしいなあ、もつ。

でも松山のアゴはよく見ると、確かに少しだけしゃくれてこる。

そして文字通り、かなりしゃくに障る男だ。

とは言つても、社交的で行動力がある松山に対して、僕が一方的に妬んでいるだけだけ。

「そう。僕は松山が苦手だ。」

自分とは対極的な存在つていうのもそうだけど、何よりも僕は彼に、これ以上ない弱みを握られている。

「…あつ、思い出した」

握ったおにぎりを皿の上に置いてから、奏ちゃんがぼそりと呟く。

それにしても彼女が作ったおにぎり、野球ボールくらいの大きさなんだけど、あのこどもたちにはちよつと大きすぎるとんじやないのかなあ。

「あの牛乳瓶メガネの人、去年の100ハイでラジオ体操をやつた人だ。ですよね？中井さん」

「えつ、夏目さんのこと？…ああ、覚えてないけど」

「いや、間違いないです。那人、かなり変わつてますよね。ヤバいな、わたしとキャラが被る」

「安心しろ。お前以上の変人なんかいねーから」

「『『プカ×2（プカプカ）』のアゴほどじやないよ」

「何だと、ためえ、『ハーモニコ』へん言つてみるー。」

もつ、ケンカしてる暇なんかあつたら、もつと手を動かしてよ。

といひで「プカ×2」といひのは、秦ちやんが松山に付けたあだ名だ。いつもタバコを「プカプカ」ふかしているから、そう呼ぶことに決めたらしい。

表記が「プカプカ」じゃなくて「プカ×2」なのは、「記号や数字が混じっている方が火星語っぽい」という彼女のポリシーがあるから。よくわかんないけど。

こんな具合で、彼女はいろんな人の特徴をもじっては「～×2」と呼んでくる。

まあ、僕は普通に「中井さん」だけね。要するに、それだけ無個性つてことか。「うーん…。

4歩目・苦行×夢

それにしても、100ハイか。正直に言って、あんまりいい思い出はないな。

過去2回、100ハイに参加して、僕は2回とも完歩することができた。

でも、ちつとも楽しくなかつた。

100ハイのペアは役員が決めるから、必ずしも気心が知れた人と一緒に歩けるとは限らない。時には男女比の関係で、3人で歩かなきゃいけないことだってある。

そんな組に入れられた日には悲惨だ。2人だけで会話が盛り上がり、あぶれた1人は寂しく地図を読みながら歩く。

僕は過去2回とも、そんな惨めなガイド役を強いられてきた。

だから100ハイマジックなんて、夢のまた夢。

僕にとって100ハイは、ただの苦行に過ぎなかつた。

本当は僕だつて、女の子と2人きりで歩いてみたい。

いろんな話をし、いろんな景色を見て、せめてその100kmの間、だけでも、本当の恋人どうしになつたみたいに、甘い時間の中を歩いてみたい。

でも、絶対に無理だよ。

僕みたいなやつと一緒に歩いてくれる女の子なんか、いるわけがない。

「いとしたらあの子だけど、そのチャンスはもう、3ヶ月前に自らの愚行で潰してしまった。

本当に僕は、どうしようもないダメ男だ。

「…だからーあれば咲恋さんのせいだったんだってー」

まだ言ひ合つてゐるよ。

実はこの2人、去年の100ハイではいずれも途中リタイアという結果に終わっている。だからそんなことで責め合つたって、虚しいだけだと思うんだけどなあ。

「咲恋さんが道に迷つたりするからー体力的にはまだ余裕だったのに、そのせいで足切りになつただけだつーのー」

「うわー、人のせいにするなんて、しゃくれアゴの風上にも置けないやつだな、お前は」

「いいよ、置かなくともー」

「まあ、わたしは今年こそ、絶対に完歩するけどね」

「いいや、絶対に無理だね」

強い調子で、松山が言つ。

「だつてお前、全然地図読めねーじゃん」

「いいんだよ。そんなの別に、合理的にM&A方式で補つちやえば」

M&Aなんて、奏ちゃんはまた小難しい言葉を使つ。

要するに、地図が読める人とペアを組んで、その人について歩くつていうことかな。確かに、一番合理的で楽な方法だと想つ。

「そうじつわけで、中井さん」

えつ、どうじつわけ？ いきなり話題を振られて困惑つつも、奏ちゃんの方を見る。

「豚の脳みそは譲りますから、それで一つ、わたしに買収されてくれませんか？」

「はあ、買収？」

「今年の100ハイ、一緒に歩いてトセ。中井さん、地図を読むのは得意ですよね？」

その言葉は、僕の耳に3周遅れで入ってきた。

「……うん。いいよ

「よしつ、交渉成立」

短く言つてから、彼女は再びおにぎり作りに精を出し始めた。

心なしか、野球ボールサイズだつたはずのおにぎりが、砲丸サイズまで大きくなつてゐるような気がする。

そんな彼女の様子を、僕はおにぎりを握ることも忘れながら、しばらく呆然と見つめるしかなかつた。

今僕、100ハイに誘われた？

女の子から、サシで…？

そんなこと、もちろん今まで一度もなかつた。

どうせ今年も適当な人と組まされて、ガイド役をさせられるものだとばかり思つていた。

僕と2人きりで歩いてくれる女の子なんか、いないとばかり思つていた。

それなのに、こんな僕でも、「必要だ」と書いてくれる女の子がいるなんて。

100ハイマジック、か。

「みんなーーおにぎり足りないよーーほり、もっと頑張つてーー」

部屋に入つてくるなり、夏田さんが僕たちおにぎり班を急き立て
る。

「中井くんも、作ったおにぎりを置いて」

夏田さんと言われるがままに、ぼんやりしながら三角形になり損ねたおにぎりを銀皿の上に置く。

…こんな僕だけど。

100ハイなんか、苦行でしかなこつて思つてた僕だけど。

今回ばかりは、ちよつとくらいい、夢を見たつていいくね？

4歩田・並行×夢（後書き）

以上、中井さんと奏が100ハイで一緒に歩く約束をするペルソナでした。

100ハイでずっと寂しい思いをしてきた中井さんにとって、奏の誘いは夢みたいにうれしいことなんですね。

次回より、10円の話に戻ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6115y/>

テク×2（テクテク）

2011年11月24日14時56分発行